

『恋がゆれる、キスの誘惑』

著：小塚佳哉

ill：沖 麻実也

「……あ、榛名さん！ お待たせー！」

そう言いながら手を振り、理友は校門から駆け出した。いつものように至恩学院の校門からちょっと離れた目立たないところに、漆(しっ)黒(こく)のマセラティが停まっていた。

運転席から降りてきたのは、すらりとした長身だ。

榛名は仕事先からまっすぐ来たのか、仕立てのいいスーツを身につけているが、ネクタイを締めず、ごく普通の会社員という印象は欠片(かけら)もなかった。しかも肩までかかる長い栗色の髪に縁取られた顔はやたらと目鼻立ちが整っていて、それこそ、モデルとか俳優のように華やかな雰囲気がある。

「こっちこそ遅くなって悪かったな、理友」

そう言いながら微笑みかけられ、駆け寄った理友は嬉しそうに答えた。

「うん、だいじょうぶ。今日は宿題やってなかった賢ちゃんにつかまってたし」

「テストは？ 無事に終わったのか？」

「うん、終わった！ あ、それより、さっき送ったオレのメール、見てくれた？ 榛名さんがびっくりすることがあるんだよ！」

「見たけどさ、びっくりってなんだよ？」

「びっくりって言ったら、びっくりだってば！ 羽田さん、こっち、こっち！」

そう呼びながら振り返ると、理友は校門で立ち止まっていた羽田を手招きする。

龍樹や賢一と別れ、屋上から一緒に下りてくる時、羽田はしばらく日本を離れていたのだから、榛名にもずいぶん会っていないと話していた。それだったら、これから自分を迎えに来るから会っていけばいいのに、と誘ったのだ。

ゆっくりと近づいてきた羽田は、ごく自然に言った。

「久しぶり、峻。元気そうだね」

「……サキ？」

眩くような声を聞いて、理友が訝(いぶか)しげに見上げると榛名の顔は強(こわ)張(ば)っていた。

「どうして、おまえが、ここに……こんなところにいるんだ？」

「帰国したんだよ、つい最近。それで留学する際にお世話になった先生……英語の神(かん)崎(ざき)先生や八木沼先生にご挨拶(あい)拶(さつ)しに来たんだ」

「だからって、なんで……」

どことなく歯切れの悪い榛名に、理友は首を傾げる。

「あれ？ 幼なじみだったんだよ、榛名さんと羽田さんって……」

そうだよ、と横から答えたのは羽田だった。

「久しぶりだから、峻も照れてるんじゃない？ とにかく元気な顔は見たし、僕は失礼するよ。先生方への挨拶を後回しにしちゃったから早く戻らないと」

「……あ、すみません！ オレが強引に誘ったから」

「いや、僕も久しぶりに峻に会えてよかったよ。ありがとう……ええっと、理友くん」

それじゃ、と羽田は片手を上げて校内に戻っていく。

だが、それに手を振り返していた理友は、ふと気づいた。

羽田の背中を見送りつつ、マセラティの横で凍りついたように立ち尽くす榛名は、いまだに表情が強張っていた。

「榛名さん？」

「あ、ああ……なんだ、理友？」

上の空で問い返す榛名に、あらためて理友は訊ねた。

「なんだっていうか、羽田さんと久しぶりだったんだよね？ オレ、榛名さんの幼なじみって聞いてたんで、久しぶりに再会したら、びっくりするっていうか……すごく喜んでくれると思ってただけ」

「……あ、ああ、びっくりした。ちょっと、びっくりしすぎただけだ」

「びっくりすぎ？」

理友が訝しむように突っ込むと、それに苦笑を返した榛名は、ようやく表情を和(なご)ませた。

だが、理友の頭を撫(な)でながら意を決したように言う。

「……理友、ちょっと待っててくれ。すぐに戻ってくるから先に車に乗ってろ」

うん、いいよ、と理友が頷いた途端、榛名は駆け出していく。

すらりとした長身は、あっという間に校門の向こうに消えてしまった。

羽田に話しかかったことでも思い出したのかな、とのんびりと考えながら助手席に回ったが、理友が開けようとする、マセラティのドアはロックされていた。

どうやら、榛名がうっかりしたらしい。さっきは様子がおかしかったもんな、と思いながら理友は考え込む。

以前から、榛名には優等生の幼なじみがいると聞いていた。

幼なじみといたら、理友が真っ先に思い出すのは龍樹と賢一の二人だ。

なんでも遠慮なく言い合って、時にはケンカもするが、すごく仲がいいというか、誰よりも互いを理解し合っている。

そんな友だちがいるなんていいな、とうらやましく思っていたし、そんな友だちと久しぶりに再会したら、きっと嬉(うれ)しいに違いないと思ったのだが、榛名の示した反応は理友の予想とはちょっと違っていた。

もしかしたら余計なことをしちゃったのかも、と次第に不安になった理友はいてもたってもいられなくなり、マセラティから離れて校門に戻った。

キョロキョロと榛名や羽田の姿を探しつつ、高等部の校舎に戻る道を駆け上がっていくと、植え込みの向こうから聞き慣れた声が聞こえてきた。

「……ってゆーか、サキ！ どうして、ここにいるんだよ？ 理友に何を言った？ だいたい、どうして理友と一緒にいたんだよ？」

「そんなにまくしたてるなよ。あいかわらず大げさなんだから、峻は……」

「うるせえ！ いいから、オレの質問に答えろ！」

「だから、さっきも言ったと思うけど、オレが今日、ここにいるのは先生方に帰国の挨拶に来たからだよ。それは嘘じゃない。留学をする時に世話になった先生たちに、あらためて礼を言いに来たんだよ」

「で？」

問い詰めるような榛名の声に、どこか笑いを含んだ声が応える。

「……でって？」

「だから、なんで理友と一緒にいたんだ？」

「それは彼に質問すれば？」

「サキ！」

「ああ、もう面倒だな……本当に偶然なんだよ。ちょっとなつかしくて屋上に立ち寄ったら、理友くんだけ？ 彼とその友だちが、たまたま屋上にいたんだよ……それだけだし、オレは何も余計なことば言っていない」

うんざりしたような声で説明しながら、さらに羽田は続ける。

「そういえば、理友くんの友だちにハーフのきれいな子がいたよ。最初はてっきり、あの子が峻の新しい恋人だと思ったんだけど……違うんだよね？ でも、意外っていうか、驚いたよ。あんな子供っぽい普通の子とつき合ってるなんて」

「うるせえ、サキには関係ない」

「そう？ 関係ないこともないんじゃない？」

「……サキ？」

尖(とが)っていた榛名の声が訝しげに問い返す。

思わず、理友は植え込みの手前で立ち止まってしまった。

盗み聞きなんてよくないと考えながら、話の先が気になってしまう。

しかも立ち去るべきだとわかっているのに、理友が一步も動けないままで戸惑っている間に、羽田は呟くように言った。

「ねえ、峻？ なんで、オレが帰国したんだと思う？ 日本に帰国して、オレが真っ先に何をしたかったと思う？ たとえば、まず峻に謝りたいって……もう一度、最初からやり直したい、やり直すことができたらって、オレが一度も考えなかったと思う？」

そんな言葉を聞いて、理友は息を呑(の)んだ。

謝りたいって？

最初からやり直すって？

それって、つまり、どういうこと？

そんな疑問が次々と湧(わ)き上(あ)がって、ぐるぐると回ってしまう理友の脳裏に、榛名から以前、教えてもらった話が甦(よみがえ)る——前の恋人と別れてから、榛名は周囲から心配されてしまうくらい、ひどく落ち込んでいたという話を。

(……ちよ、ちょっと待ってよ。だったら榛名さんがすごくへこんじゃうよーな別れ方をした前の恋人って、まさか)

そう思った瞬間、理友は無意識に後(あと)退(ずさ)った。

だが、足元を見ていなかったせいで、植え込みの段差に踵(かかと)が引っかかってしまい、勢いよく転びそうになって、あわてて振り回した両手で植木の葉を撒(ま)き散らし、ガサガサと派手な音を立ててしまった。

当然のことだったが、その音で羽田と榛名が振り返る。

植え込みの手前にいる理友を目にした途端、羽田は意味ありげな苦笑を浮かべたが、榛名は凍りついていた。

わざとではないにせよ、立ち聞きしたことがばれてしまって気まずい理友よりも、はるかに困惑した表情を浮かべていた。

本文 p21～29 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>